

依御乳父賀、公經參入云々

一聽直衣事○中

御乳父御侍讀皆聽之類範爲長、聽昇殿、略

一近習事○中

予代始、或坊官舊勞御乳父之親知等濟々也、而自院皆被止○下

〔保元物語三〕義朝幼少弟悉被失事

保傳謂乳母

此君達ニ各一人ツ、乳母共付タリケリ、内記平太ハ天王殿ノ乳母吉田次郎ハ龜若、佐野源八ハ鶴若、原後藤次ハ乙若殿ノ乳母也、

〔吾妻鏡十二〕建久三年四月十一日壬子、若公貞曉七歲、御母常陸入道姉乳母事、今日被仰野三刑部丞成綱法橋

昌寬、大和守重弘等、而面々固辭之間、被仰長門江太景國畢、仍來月潛奉相具、可上洛之由、被定云云、他人辭退者、御臺所御嫉妬甚之間、怖畏彼御氣色之故也云云、

〔增鏡十五〕帥村時雨の御子良世をもくなやませ給ひて、あへなくうせ給ひぬ、○中御めのとの源大納言親房、我世つきぬる心ちして、とりあへずかしらおろしぬ○下

〔倭訓栞前編三十二〕めのとこ 乳母の子をいふ也、乳母子通鑑唐代宗紀に見ゆ、

〔吾妻鏡一〕治承四年十一月廿六日甲戌、山内瀧口三郎經俊、可被處斬罪之由、内々有其沙汰、彼老母

武衛源賴朝御乳母聞之、爲救愛息之命泣參上○中武衛無殊御旨、可進所預置鎧之由、被仰實平、實平持參之、

開櫃蓋取、出之、置于山内尼前、是石橋合戰之日、經俊箭所立于此御鎧袖也、件箭口卷之上、注瀧口三郎藤原經俊、自此字之際、切實乍立御鎧袖、于今被置之、太以揭焉也、仍直令讀聞給、尼不能重申、子細拭雙涙退出、

〔愈の須佐美二〕神崎與五郎は、故淺野内匠頭長矩殿の乳兄弟なりしとぞ、其母上方に居たりしが、

乳兄弟

乳母子